

< 発表 >

東亜同文書院の中国語教育と私

東亜同文書院大学 41 期・元 NHK テレビ中国語講座講師 宮田一郎

宮田 ただいまご紹介にあずかりました宮田一郎でございます。これから母校東亜同文書院で受けました中国語教育にまつわるいろんな思い出を少しばかりお話させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

私は今ご紹介がございましたように、東亜同文書院第 41 期の予科に入学した学生でございます。大学に昇格しましてからの第2回の卒業生でございます。昭和 18 年 12 月、いわゆる学徒出陣により戦場に召されまして、戦地におったまま翌年の9月に戦時繰り上げ卒業となりまして、ふたたび母校の門をくぐることなく終わってしまいました。大変悔しい思い出が残っているわけでございます。

私は福井県の派遣生でございます。富山県出身の同学には北陸3県のよしみもありまして、特に親しくしていただきました。入学して予科寮に入ったわけでございますが、その時の部屋の室長さんが桜田治平とおっしゃる方でございます。本県の富山商業のご出身であったと思っております。小柄な美少年で、大変スケールの大きい方でございます。衆望を担って全寮の委員長なども務められました。大変懐かしい方でございます。ご来場の皆様の中にもあるいはご存じの方がいらっしゃるのではないかと思います。

昭和 15 年に入学して昭和 18 年 12 月学徒出陣、それから終戦となるわけでございますが、予科2年・学部3年で5年、上海におる予定でございましたけれども、そういうことで4年に満ちませんでした。しかしこの3年有余の歳月は、ちょうど私達の青春時代でありまして、ある意味においては人生で最も輝いていた時代ではないかと思っております。先ほども馬場先生のご紹介にございましたが、もともと虹橋路(ホンジャオロ)にあった

学舎が、中国兵の放火によって焼き払われましたために、当時海格路(ハイコーロ)の近くにありました交通大学が、戦火を避けて内陸地方に移ったあとの校舎が空いておりました、そこをわれわれの校舎として使用させていただいたわけでございます。ちょうど道路1つを隔てたところがフランス租界でございまして、そこは近代的なヨーロッパ風のとても瀟洒な町でございました。これに対してキャンパスの左と右は、中世そのままの手工業の作業場や小商いの商店などが雑居する下町で、この左のほうは低いバラック建ての貧民窟というような感じの、大変奇妙な一角でございました。

学校にはクリークに架かる石の橋を渡りまして、先ほどの井上先生の時の写真に出ておりました朱で塗った大きな校門からキャンパスに入るわけでございますが、広い並木道に囲まれたきれいな芝生の中庭がございまして、その周囲に講堂、図書館、体育館などがありました。大変広いキャンパスでございまして、陸上競技用のフィールドやトラックもありましたし、キャンパスのどこどこに木立がありまして、そこに教職員の宿舎、われわれの学生寮、日本人のお医者さんと看護師さんが常駐されております診療所というようなものが点在しておりました。今お話しておりましたがその時の風景がまざまざと頭に浮かんで参ります。

その限界で一番懐かしいのは、まあちょうど食べ盛りだったせいもあるかも知れませんが、校門を出てすぐ左のところの、クリークに面した小さいラーメン屋です。道に面して竈のある調理場、人が1人やっと通れるような通路を隔てた横が帳場、その奥が客席になっていまして、そこに4人がけのテーブルが3~4個ある、非常に小

さいものでありました。杏花村(アンホツェン)、というラーメン屋には似合わないきれいな名前でしたが、特に懐かしいのは、そこで食べていた排骨麵(パッコミー)というラーメンです。舌が焼けるほど熱いスープの麵の上にスペアリブをジュッと焼いたものを載つけて食べる、それだけのものですが、われわれにとっては忘れられない青春の味であり、天下一品の味でございました。

私は前世紀の80年代、よく上海に行っておりました。その時いつもお会いする上海市の教育委員会のトップの方が交通大学のご出身と伺いまして、そのラーメン屋にまつわる思い出をお話したところ、「戦後私は交通大学の学生だったが、その頃まだありましたよ。江沢民さんもあの排骨麵を食べたんじゃないでしょうかね」というお話でございました。江沢民さんというのは前政府主席で、交通大学のご出身であります。

東亜同文書院と言いますとなにか中国語の語学学校であるような感じをお持ちの方も少なくないようですが、先ほど来、馬場先生のご紹介にありましたように商科大学でありまして、卒業生の学士号も商学士、それから学生は主として経済・商業に関する教科を履修いたしておりました。ただ目的が中国で働くビジネスマンの養成でございますので、当然に中国語は学校の教育の大きな柱の1つとなっております。中国語の授業は商科大学には珍しく卒業の最終年次までありました。それから標準語(北京官話と言ったほうがお分かりかと思いますが)と、標準語の他に方言の授業もありまして、上海語は必修、広東語は選択科目となっております。

文学作品も必修教科となっております、現代文学作品では老舎、北京語で書く作家です、皆さんご存じの魯迅、魯迅は上海語まじりで書いているので有名でございますが、そういった方の小説の講読があり、その他に「紅樓夢」、これは清朝にできました小説で、北京語寄りでございます、「児女英雄伝」、これも清朝末期の小説でございますが、そういう近世の文学作品も必

修となっております。その他に古文の訳読。唐宋八家文を現代の中国の口語に訳す、そういう教科もございまして、商科大学ではございますけれども、現在の大学の文学部中国語中国文学科、あるいは外国学部の中国語学科にそう引けを取らない内容であったと思います。お陰をもちまして私は商科大学の出身ではございますけれども、中国語の教育と研究でいくつかの大学の文学部、外国語学部の教員として身を立ててこられたわけでございます。

と言って、私は特に学生時代中国語に身を入れたということはありません。普通の書院生であったと思っております。この普通の書院生の目から見て、東亜同文書院の中国語教育がどうであったかということですが、特に異色なものだったとは思っておりません。ただ1つ痛切に感じたのは、先生方がプロ養成に徹しておられたことで、私達も中国でビジネスマンをするわけありますから、これだけはしっかりやっておこうと、そういうことを意識しておったものでございます。このプロ養成の中国語ということで特色があるとすると、とりわけ発音教育を重視していたことでしよう。

入門時には発音と言うよりも発声練習、これに相当の時間をかけまして、いつまで経っても「アア、アア」とばかりやっております、この調子ではいつになったら中国語を教わるのだろうかというような思いをしたものでございます。しかもそれが教場(教室)だけではないんですね。授業が終わって部屋に帰る。そこで先輩にしごかれるわけです。先ほど井上先生も「書院がらす」ということで紹介されておりましたけれども、どういことかと申しますと、書院では入学してからほぼ1年ほどのあいだ先輩に付きまして、その日習った課の音読の特訓を受けるわけです。夕食後1時間、それから翌日朝食前1時間、特訓と言うよりもしごきですかね。そういったものを受けるわけなんです。先輩もかわいがってくれたと言うか、ちょうど相撲取りが後輩をかわいがるようにもんで、時にまあ「しごかれた」というような印象の

残るものもたくさんございました。

だいたい同じ県の1期上の先輩に習うのが普通でございましたが、私は先輩に福井県出身者がおらなかったの、埼玉県の方の1期上の方にしごいていただきました。大変厳しく、そして非常に丁寧に教えていただきました。舌の位置とか反り方など、指を突っ込まんばかりの教え方でありました。忘れられない思い出でございます。しかしこれは、そういった後輩の指導をする先輩にとっても、同時に再学習の好機になったわけですね。それによって自分の中国語を点検し、基礎を再構築することができたと思います。これは自分が後輩を持って指導するようになって痛感いたしました。

外国語教育というのは申すまでもなく、聞く・話す・読む・書く、この4つの技能を育てることにあるわけでございます。日本の戦前の英語教育は、そのあとの2つ、読む・書くを中心にした典型的な方法でございましたが、書院の中国語教育は聞く・話すを重点にしておりました。これはビジネス養成という目的からすれば当然でございます。別に机の上で文法論をたたかむというような学者養成ではないわけでございますので、当然に実践的な聞く・話すに重点を置いた教育で、そして非常にそれに徹底していたと思います。

これを端的に示しているのがテストの方法なんです。一部、たとえば先に申し上げました「紅樓夢」「兒女英雄伝」というような近世文学作品の講読とか、古文の訳読、唐宋八家文などを現代中国語に訳す、そういうのは別ですが、時文を含めて試験は全て口頭で行なわれておりました。いっさい文字を介しません。これは非常に徹底したものでございました。どういようにやるかと言いますと、試験開始のベルが鳴りますと、先生はその前に教室に入っておられますから、ベルが鳴るとポケットから紙を出して、出題されている中国語をお読みになるわけですね。それをわれわれは耳で聞きながら、日本語の訳を答案用紙に書いていく。そういうテスト方法でござい

ました。これは書院独特と言ってよいかも知れません。「ああ、失敗したなあ」と後で思うようなこともたくさんございました。耳で聞いて書くわけですから、聞き逃したら終わりです。大変緊張したものでございます。

さきに申し上げました「時文」というのは新聞の論説や新聞記事です。文語ではないが口語でもない。いわゆる書き言葉体の文章です。試験は今お話したように先生がお読みになり、その日本語訳を書いてゆくのですが、非常に堅い文章ですから、なかなか聞き取れないんですね。それに一音節の言葉が多いせいもありまして、聞き取りに迷うわけです。われわれは「新聞は目で読むんだから、こんな試験方法をやらなくてもいい」という怨嗟の声を盛んに上げたものでございますけれども、これは聞き入れてもらえませんでした。まあ泣き泣きやっていたというところでございます。

ちょっと話が前後しますが、発音訓練は耳の聴覚訓練でもあります。発音をやかましく言うということは、聞く耳の養成にもつながっておったように考えております。しかし日本の今の中国語教育では、私もそうでしたけれども、あまり発音練習に時間を取らずに、ニーハオとかシェーシェーとかツイチェンとか、そういうことをどんどん教えていく。まあ学生もそれを喜ぶし、いつまでも「アア、アア」なんて言っていたら、学校やめちゃいますから妥協してるわけでしょう。

私が中国語を教え始めた頃、先輩の教授に「お前そんなに馬鹿みたいに、このアはいかんとかこのイはいかんとか、そんなにやかましく言うのはよせ。音韻論的に許容される範囲ならまあまあで行け。そして先に進め。学生の発音は徐々に直していったらいい」ということを言われました。その意味はだいたい私にも分かりましたけれども、今の新制大学の教養課程の中国語教育と、われわれ書院の中国語教育とは違うんだなあ、ということを痛切に感じたものでございます。

ところで、聞く・話すを中心にするというのは、

やはり中国人の先生の参加がなくてはできないことです。日本でも小学校から英語教育をして、先生が英語で英語を教えることが言われておりますけれど、なかなかできない。難しいと思いますね。やっぱりネイティブの、その言葉を母国語とする先生の協力なしではできません。書院は幸い現地にいたというせいもございまして、中国人の中国語の先生と、日本人の中国語の先生が同数でした。

近世語の文学作品、尺牘(書簡文)は日本人の先生、古文の訳読は中国人の先生が単独で教えられましたが、その他は作文も含めて、全部ペアで教えられました。そして中国人の先生が主体なんですね。僕たちは日本人の先生はいいなあ、出欠を取るだけで飯が食えるんだと冗談口をたたいておりましたけれども。

しかし今思いますが、日本人の先生もたいへん苦労されておったんですね。中国人の先生は音読訓練の他にいろいろ文法的な問題、修辭法の問題、あるいは語句の用法の問題などを、学生にも分かるような中国語で繰り返し繰り返し、手振りをまじえながらお話をされる。日本人の先生はよく見ていて、だいたい顔を見れば、分かって頷いてるのか、いい加減に頷いてるのか分かるわけで、下手に頷くと「お前1回説明してみろ」と厳しい指導の仕方でした。しかしこのような形のペアを組んだ授業は、聞く・話すためには非常に重要でございまして、私は外国語を教える場合、入門時は特に外国人の先生と日本人の先生のペアによるのが最適だとそう思っております。NHKの中国語講座は、ご覧になった方はお分かりと思いますが、全て日本人スタッフと中国人スタッフの共同作業で運営しております。私がテレビの中国語講座を担当した時もそうでございまして、私の時はチーフゲストは陳文芷さんでした。陳先生は愛知大学ともご縁がありまして、かなりの間愛知大学の中国語教師をしておられました。陳文芷の他にまたヘルプする中国人の若い人もおりまして、役割をどう分担するか、どう組み合わせるかが、私の主な仕事でありまし

た。私はその講座で中国語をあまりしゃべっておりません。われわれがしゃべるのは猿真似ですから、うまいわけではないんです。全部中国人の先生にやってもらって、日本人学習者が注意すべき点をちょっと指摘することに徹しておりました。これは書院でペアで教えられた時に、中国人の先生と日本人の先生がやられてた方法でございまして、当時のクラスメートから「お前は書院の真似をやってるのか」というようなことを言われたものです。

しかし書院のこの方法は今から見ても、非常に良い方法だったと思います。特に中国人の先生は何年も教鞭を取っておられ、学生が分かるか分からないかの見当がついておりますから、分かり易い言葉で、時にゆっくりとしゃべっていただけのし、それから手振りがなかなかユーモラスなんですね。われわれはそれにつられて、みんな中国語の虜になっていったものでございませぬ。

日本人の先生は、さきに申し上げたように学生が中国人の先生の説明を聞き取っているかどうか、学生の顔をよく見ながら、怪しいと思うと「お前今の先生の説明はどうだった」と質問されるわけです。うまくできないと、中国人の先生にもう1回説明をお願いしろと指示されました。その時には中国語をしゃべらなくてはなりませんから、そういうことで学生の話す力を養っておられたのではないかと思っております。

日本人の先生はそのほかに、ご自分のご研究も時にふれてお話しになり、中国人の先生の説明を補足するというような形のお話でございました。抽象的の「抽」は日本語に訳しますと、抜く・(煙草を)吸う・引っぱるという意味があります。それから縮むとか、細い鞭で叩くのも「抽」です。日本語にするといくつもの訳になりますね。なぜそうなったかを先生が説明されるわけです。たとえば、吸う、吸い取る動作です。それから、抜く、引っぱる動作です。鞭で叩くのも引っぱる動作です。動作に共通性がある、だからこういう意味になるんだというようなことを、これは日本人の先

生が教えてくださいました。先生がいろいろ研究されていることをその時に披露されるわけです。

日本では靴に油を塗る、白粉を塗る、ポマードを塗るの「塗る」と、汗を拭くの「拭く」とは意味が全く反対でしょう。ところが中国では摩擦の「擦」で、靴に油を塗るのが「擦油」、汗を拭うのが「擦汗」です。日本では反対の動作ですが、中国では同じです。これは面白いですね。そういうのも、先生は「お前やってみろ、塗る動作と拭う動作とは、結果がどうなるかということだけであって、手の動作は同じだ、だから中国では同じ表現をするんだ」と、辞書には無い説明を、機会をとらえて紹介されました。先生の手振りをまじえたご説明を、私も教室で教える時に何回も利用させていただきまし、このような話をしている時いつも恩師のそういったお姿が彷彿として目の前に浮かんでまいりました。

それから私は書院が上海にあったということも、卒業生の中国語の能力に大きな影響があったと思います。ある人は「書院が北京にあったら、中国語はもっと上手になっていただろう」と言われます。それはそうかも知れません。今は上海では標準語(正確には共通語)が非常に普及してきておりますので、街を歩いてお互いに標準語で話しているのをよく耳にしますが、当時は校門を1歩出ると、そこはもう上海語でした。その頃の上海の人はお互い同士の日常的な会話は上海語なんです。だからわれわれが商店で歯ブラシを買うとか、ハンケチを買うとか、タバコを買うとかいう場合は上海語なんですね。バスに乗る、電車に乗る、車内で行先を言って切符を買う、これも上海語なんです。そういう場合に標準語(北京語)で言っても通じないか、あるいは通じても、返ってくる返事は上海語というようなことでもございました。そういうわけで私達は外出する度に少しずつ上海語を覚えていきました。これは、上海にあった利点でしょう。

予科を終えて学部に入りますと、井上先生のお話に出てまいりました、呉羽の中国語の主任

をしておられたわれわれの恩師坂本一郎先生の上海語の授業がありました。しかし、その頃には学生の大半はだいたい「これいくらだ」、「どこへ行くか」、「じゃあさよなら」というような上海語の生活用語はみんなマスターしているわけで、先生もそれを見越して授業をなさったように覚えております。これはやはり経済の中心地は上海でありましたから、そういう面でビジネスマンとして働く書院生には非常に良い環境ではなかったか。なるほど北京語だけをマスターするという点では不利な点もあったかも知れませんが、広い意味の中国語を話すという点では上海の方が言語環境としても適切だったのではないかと思います。

坂本先生に上海語を教わるようになって、気が付いたことは、われわれが街で覚える上海語は人力車を引く人とか、あるいは小さい商店の店員さんとか、いわゆる庶民のしゃべる上海語であったことです。先生が教室で教えられる上海語はどちらかと言うと蘇州語寄りの、中・上流階層の言葉だったということがだんだん分かってまいりました。上海語も上海人の先生と坂本先生とのペアの授業でございましたが、学生がその上海人の先生と上海語で会話をしている時間も組まれていました。みんながいろいろ用意をするわけですが、だいたい名前の順番に当てていきますね。そうすると宮田だとお終いのほうなんです。ある日、自分が言おうと思っていたのをみんな同級生が先に言っちゃったから、その時思いつきで、今でも覚えておりますが、「先生のお父さんお幾つですか」と、ちょうど上海で車引きと話をしている時に覚えた言葉づかいで言ったら、先生から叱られましてね、「無礼者！」というような感じでどなりつけられました。「你爸爸今年多大了？」を上海語で言ったわけです。中国語を勉強の方はそのニュアンスをお分かりかと思いますが、「あなたのお父さん今年幾つになった」と聞いたわけで、僕は別に悪気で言ったつもりはないんですけど、恥しながら当時はその程度の学力で、それで上海人の先生は顔色を

変えて怒られたわけです。「それではどう言ったらいいでしょうか」と聞いたら、「令尊大人今年高寿?」。そういう上海語を教室で習っていたのです。

上海にいたお蔭で標準語(北京語)のほかに、主要方言である上海語を身につけていったことのほか、もう一つよかったのは、いろいろな方言を耳にしたことです。上海というのはみんな各地から集まって来た人が作った街です。そういう人達の話すお国訛りの上海語やその他の方言を、街に出るといつも耳にしておりました。

先生方はそれを非常に警戒されていて、方言が出ると「どこで覚えた」とよく叱られたものです。私も標準語の授業の時にずいぶん叱られました。今思い出すのは、「ナシ(梨)」を標準語で「梨(リ)」と言ったらいいんですが、「柿(カキ)」は「柿子」と「子(ツ)」を付けます、それから「栗」と「子」で「栗(クリ)」になる、それと同じと思って「梨子」と言ったら、先生に叱られて、「お前どこでその言葉を覚えた。どこで聞いたかその場所を言え」とずいぶん問い詰められまして、なんでこんなに叱られないといかんのかと思いました。

方言を研究するようになって、やっと分かりました。“梨子”は方言なんです。先生は私の標準語に方言がまじるようになったのを厳しく指摘されたのでした。恐らく発音でも崩れが起きていたのでしょう。

標準語が崩れるのは警戒しなければならないが、崩れた標準語も聞いて分かる、これは上海で学んだ書院生が期せずして身に付けた非常な利点だと思っております。ちょっと思い出すことがあるんですけども、戦時中東條英機総理が急遽南京に飛んだことがあるんです。その時に日本内地から付いてこられた通訳官がいるわけですけども、汪精衛さんや、南京政府の高官が話す言葉を、その通訳官が聞き取れない、それで大使館におりました清水董三さん(書院 12 期生)が通訳をされたそうです。清水さんは陛下の通訳もよくやられた方ですけども、ずっと上海育ちですから、おそらくスタンダードでない崩れ

た標準語を聞き分ける耳を持っておられたのでしょう。日本で勉強して日本以外あまり出たことのない方には、そういう崩れた言葉は聞き取りにくかったんじゃないかと思います。

それで思い出すのですが、愛知大学に東亜同文書院大学基金というのがございまして、日中関係の研究上いろいろ功績のあった人に賞金を出すようになっております。去年は、交通大学の先生が受賞されました。私も東京に行きまして授賞式に参加したのですが、その時その先生は標準語でお話になりました。ところが相当崩れたものなんですね。たとえば「霞山会」は標準語で話しますと「シアーシャンホイ」とならなきゃならないんです。ところがその交通大学の先生は「ヤーサンウェイ」と言われるんです。なぜそうなるかと言うと、「霞」は標準語では「シヤ」ですけども上海語では「ヤー」なんです。それから「会」は標準語では「ホイ」ですけども上海語では「ウェイ」です。だから「再会(さようなら)」も「ツァイホイ」ではなく、「ツェーウェイ」と言うわけですね。

それから「山」を「サン」と言うのは、そり舌音の無い方言区の人です。中国語学習時では非常にやかましく教えられると思うんですけども、中国全土から見れば、そり舌音を出せない人のほうが多いんです。そり舌音の「シー」は、そり舌音が無い方言区の人では「ス」になります。だから上海で物をお買いになって、いくらか標準語でお聞きになると「スス塊(クワイ)」と標準語で答えが返ってくる、14 元か、なら安いと思って支払うと、40 元だったり、40 元か、高いなあと思って支払うと、14 元だったりする、こんな経験をされた方はおられません。そり舌音の無い方言の人が話す標準語ではこのようになってしまいます。「山」を「サン」と発音されたのにはこういう背景があります。ちなみに上海語では「山」は「セエー」です。

この通訳をされたのは、愛知大学の東亜同文書院大学記念センター、今日センター長さんが見えておりますが、そこの方で、大丈夫かなあと

思っただけ聞いていたんですが、見事なんです、ちゃんと「霞山会」と訳されるんですよ。その他にも崩れた音がありました、それも見事に訳されるのに舌を巻きました。お聞きしましたら、内蒙古から来ておられる方でございます、内蒙古は北京の北ですからね、その北の人が南のそういった崩れた中国語を理解するのは非常に難しいんです。しかもそれを日本語にすらすらと訳され、ほんとうに舌を巻きました。同席した同期の友人も「すごいなあ」って感嘆しきりでした。彼はもと通産省の官僚をしていた男ですが、私と同じように上海語もちょっと分かるんです。だから「あの人すごいなあ、正しくプロだ」とびっくりしておりました。われわれも実はそういうプロを目指しておりました。とうとうならずには終わりましたけれども。

しかしずっと思い出してみますと、われわれの学生だった頃、学校に入る前に中国語はもうネイティブ級という学生が、各期におりました。これはびっくりしましたね。先生よりうまいんじゃないかと思ったものです。そのころ中日学院というのがあって、これは先ほど馬場先生のお話に出てきました東亜同文会（東亜同文書院を経営していた団体で、会長は近衛篤磨公）が天津と漢口に作っていました。中国人学生を収容する今で言う中高一貫教育、中高一貫の6年制の学校でした。そこへ日本の少年が小学校卒業と同時に毎年数名ずつ送り込まれていました。その頃の危機管理でしょうか。そこを出て書院に来た学生です。そして書院でさらに磨きをかけた。

戦後東京裁判がありましたね。あの東京裁判の同時通訳とか、日中初めてのLT貿易の交渉をやったのも、この中日学院出身の書院生でした。並みの書院生ではできません。よっぽどの人なら別ですけど、学校出たての青二才ではとてもできない、そういう活躍をした、一味違った書院生がおったわけです。私の期には4人おりまして、私は幸運にも予科2年の時にそのうちの1人と一緒になりました。非常にラッキーだったと思っております。彼はいつも消灯になってベッド

に入った時、私が喜ぶもんですからいつもいろんな中国の小話、時にはお色気のある小話を、非常に分かり易い中国語で毎晩のように話してくれました。私は彼を兄のように慕っていたわけでございますが、彼の教え方もまた、ちょっとひねったところがあって、うまかったですね。今でも思い出すのがたくさんありますが、そのうちの1つにこういことがございます。

それは私達が学生の頃、学生監という職についておられた林出賢次郎先生にまつわる話です。先生は書院2期生で、日露戦争の時の、明治38年のご卒業です。卒業と同時に命を受けて、露清国境を単身踏査して、今の新疆ウイグル自治区の奥深くまで行かれた方です。その先生が調査を終えて帰られる、単身で徒歩ですからね、まあ馬車に乗ったかもしれませんが、天山山脈の麓を歩いておられると、前方から砂煙を上げて馬車がやって来る、そこには外国人（日本人）と思しき者が1人いて、お互いに顔を見合わせる、すれ違ったあと馬車が引き返して来て、「林出君ではないか」と声をかける、陸軍きつての中国通と言われた日野少佐です。この日野少佐との邂逅は今でも語り継がれています。

有名な話がありまして、意気投合した後、「どうだ林出君、俺の娘をもらってくれんか」「じゃあいただきましよう」となり、林出先生は日本へ帰って日野家を訪問されるのですが、日野家はびっくり仰天、弁髪、中国服を着た青年が突然にやって来て、「私は今回娘さんをもらい受けることになった林出でございます」と言うんですからね。ところがその娘さんはまだ女学校へ入ったばかりで、「お陰でずいぶん待たされたよ」と先生は言っておられたそうです。そういう逸話のある先生でした。

あとで外務省に入れ、外交官として一生を送られたのですが、先生が退官されることになって、船で東シナ海を渡っている時に、東亜同文書院の矢田七太郎院長から電報が入ります。母校の学生監、今でいう学生部長みたいな役職ですが、その学生監に就任してほしいという電報でした。

その時先生が打たれた返電は、「センガクヒサイヲハズ」。それが北京にいる在留邦人のあいだに伝わりまして、これぞまさに中国の「不敢当」と、一時期話題になっていたそうで、彼に「不敢当」の用法を尋ねた時、こういう話をして私に教えてくれました。まあ辞書を引きますと「どういたしまして」となるわけですが、彼は日本語の「どういたしまして」というようなのではない教え方をしてくれた。「センガクヒサイヲハズ」。拒絶ではないんですよ、OKなんです。OKだけでも深みがある。こういう非常にうがった教え方をしてくれたわけで、彼はいつもこういう教え方をしてくれました。彼にはずいぶん世話になりました、今でも感謝しております。学生時代は常に彼を目標として追いましたし、卒業して教員になってからでも、彼が生きてたらどういっしょに教え方をしたかなあ、どういっしょに説明をしたかなあと考えていたものです。

書院での生活などについて、まだいろいろお話ししたいこともあります。いろいろと走馬灯のように浮かんでいきます。あの頃私達が学徒出陣で行く時には、同期は180人おりました。それが今はもう30名そこそこです。今年は書院が無くなって66年です。やがて書院は忘れ去られるのではないかというような寂しい思いがするわけですが、しかし書院の建学の理念は、先ほどの学長先生のお話にもありましたように、脈々として愛知大学に受け継がれております。

そういった理念だけではありません、書院がやり残した仕事、たとえばわれわれの恩師が発行しようと思って未刊のまま終わった中日大辞典、これも愛知大学によって日本一の辞書として完成しました。しかも日本ではあれだけの規模の辞典が少ないだけでなく、類した辞典でも改訂はしていきませんよ。採算が合わないんです。ところが愛知大学は2回も改訂を行なってるんですね。このように非常に立派に、理念に基づいて採算を無視して、学問のために愛知大学が犠牲を払って充実・発展させていただい

ります。これは大変ありがたいことです。

辞典だけではありません。たまたま私は中国語教育に関係があるものですから、それを申し上げましたけれども、中国研究にしてもそうです。愛知大学によって発展しております。書院もって瞑すべし。私たちは皆そのように思っております。改めて愛知大学の諸先生、同窓生の皆さんに厚くお礼を申し上げて今後ますますのご発展をお祈りいたします。

なお本日は私の同志であります富山・中国ネットワークの方たちを始めとする地元の皆さん、それから東京からも私の友人、研究者が会場に来てくださいました。心からお礼を申し上げまして、つたない講演を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

注：中国全土に通用する中国語を今は“普通語”（共通語）と言っています。書院で学んでいたころは、この用語はなく、“国語”と言っていました。実際は北京官語（北京語）でした。ここで使用した「標準語」はこれらの用語を指しています。

司会 宮田先生ありがとうございました。宮田先生の中国語教育に関する貴重なお話などをお聞かせいただきました。せっかくですので質問をフロアの皆様からいただきたいと思います。時間の関係もありますのでお1人あたりにちょっと限定させていただきますが、皆様の中には中国語を学習されている方も見えると思いますので、この機会に中国語について宮田先生にお尋ねしたいとか、そういうご質問でも結構です。どなたか見えたら挙手をお願いしたいと思います。はい、どうぞ。

質問者 お願いします。先生は上海に何年頃いらっしゃったんですか。

宮田 昭和15年(1940年)にまいりまして、終戦の翌年に引き揚げてまいりました。

質問者 戦争中？いわゆる歴史の教科書で言

われる日中戦争の間ですね。

宮田 はい、そうです。

質問者 そうすると普通日本人だったら、日本の租界の割と安全地帯に住んでると思いますが…。

宮田 書院はずっと租界外でした。

質問者 そうすると、そういう日本と中国との戦争状態の中で、どうなんですか、その頃の上海の雰囲気と言うか、治安と言うか、ちょっと知りたいんです。庶民はまあ普通通り生活してたかもしれないですけど、学生達も自由に行動してたわけでしょう。普通はフランス人はフランス租界にいる。そういう安全地帯みたいところに住んでいる。そうじゃないところでは自由とか雰囲気とか治安とか、どんなもんだったんですかね。実際に生活しておられたわけですから、ちょっとお聞きしたいんです。

宮田 はい。学校は先ほど申し上げましたようにフランス租界の通りを1つ隔てたところで、租界外であります。馬場先生がおっしゃったように学校はずっと租界外にございまして、そこで生活しておったわけでございますが、私達のころも街を歩いても、その近辺でも、危険を感じることは1回もございませんでした。中国人は果たしてわれわれ学生を日本人と思ってたかどうか疑うくらいでした。遅くなってバスが無くなって歩いて帰ると、人力車夫も仕事を終えて帰るわけですね。そのころ街はもう暗く、人通りもありません。とぼとぼ歩いてるうちにどちらからともなく話しかけるようになる。北京大学は北洋学堂、交通大学は南洋学堂で、中国を2分した大学で、交通大学を西洋大学と言っていたことがあるそうですが、「南洋大学の学生か、車に乗れ」と言うわけです。「俺金がねえ」と言うといや金は要らん。その代わり走らんからね、話しながら歩いて行こう」と、そんな調子でした。庶民はわれわれ学生を、まあ子供ですからね、物を買うにしてもぼるようなことはございませんでした。むしろ終戦後、上海の日本人街を歩いた時にはちょっと追いはぎに遭ったりしましたが、学生でいる頃は何と

もありませんでした。

それから先ほど馬場先生のご報告にありましたように、あの非常に抗日運動が激しい時でも、学生は1人として被害に遭ってないんですね。中国政府はきちっと守ってくれていたわけです。それから昭和 18 年のまだ兵隊に取られる前でもございましたけれども、大旅行ができなくなりましたので近くのところで滞在しているいろいろ調査研究をしたわけです。私は本間先生と同じく愛知大学の創立に尽くされました小岩井浄先生のご指導で丹陽という町におりまして、城外の日本軍の歩哨線を越えた農村地区へいろいろと調査に出かけていましたけれども、村の人から一切危害を受けることはございませんでした。

司会 はい。ありがとうございます。よろしいでしょうか。では宮田先生、貴重なお話をありがとうございます。

宮田 どうもありがとうございます。

司会 先生方のご講演は以上をもちまして終了いたしました。最後に馬場毅東亜同文書院大学記念センター長より閉会のご挨拶がございませう。馬場先生よろしくお願ひいたします。

馬場 簡単にご挨拶を申し上げます。まず第1番目に本日の講師を務めていただきました井上先生と宮田先生に、私共衷心より感謝申し上げます。東亜同文書院が 1945 年に歴史の幕を閉じてすでに 56 年経ってるわけですが、お2人のお話を聞いて、まさに本当にビビッドに、たとえば井上先生だと呉羽の状況が、これは資料があまり無いんですけれども大変よく分かりました。それから宮田先生のほうから、先ほどの方言によって崩れた共通語、それが分かってこそプロなんだというお話。これは大変重要なことだというふうに思いますし、同時に上海の雰囲気が、戦争中も含めて大変よく分かりました。この2つの点について私、大変感謝申し上げます。ど

うもありがとうございました。

それから2つ目に、ご参加いただいた皆さんです。本当に長時間ありがとうございました。実は私共こちらに来る時に、東亜同文書院なんて言ったってそんなに知名度があるわけじゃないし、果たして講演会にどのくらい来ていただけるか、正直申し上げて大変心配していました。100名ぐらいの座席を用意してるんですけども、まあ学生もそうですが詰めて座りませんから、ところどころ空いてても50人ぐらい入っていただくと充分格好が付くんじゃないかな、というふうに実は内心思っていました。実際はもっとたくさんの方に長時間ご参加いただきました。いろいろネットワークやなんかでご尽力いただいたというふうに今も出ておりましたけれども、まず長時間ご参加いただいた方、それからいろいろこの講演会についてご尽力いただいた方に感謝申し上げます。それが2つ目の私の感謝の言葉であります。

それで先ほど司会からもありましたけれども、明日は呉羽の見学会を予定しておりますし、展示会でも時間を付けて説明会を行ないます。今日も6時まで展示会をやりますので、もしお時間がありましたら見ていただくと共に、お知り合いにもちよっとお話をさせていただければ大変ありがたいと思います。

最後にご後援いただいた富山市の教育委員会、北陸中日新聞、北日本新聞社、富山新聞社、財団法人霞山会(先ほどの「ヤーサンウェイ」)、それから愛知大学の同窓会に感謝申し上げます、私のご挨拶とさせていただきます。本日は本当にどうもありがとうございました。

司会 馬場先生ありがとうございました。これもちまして愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催の講演会を終了いたします。皆様本日は長時間にわたり講演会へのご参加、誠にありがとうございました。どうかお気を付けてお帰りくださいませ。皆様誠にありがとうございました。